

## 〈研究ノート〉

# 日本文化を背景とする「芸術」への岐路

## —合気道家多田宏インタビュー—

### The Crossroads towards “Art” against the Background of Japanese Culture:

### Interview with Hiroshi Tada, Aikido Master

向井 晃子

Akiko MUKAI

#### I はじめに

本稿は、近代における日本の美術と芸術を巡る人為的な線引きに対する問題意識を基に、日本文化を背景にした美術及び芸術を考察するための基盤づくりの一端として行った合気道家多田宏へのインタビュー（以下、本インタビューと表記）を記録し、公開することを目的としている。明治期に日本は、欧米の美術を基準として美術制度を創設した。そのとき人為的に「美術」とそうでないものの線引きが行われ、欧米の美術のカテゴリーにない美的価値観が公的な美術の枠組みには入らなかった。このような明治期に制定された美術制度を検証した先行研究に、佐藤道信と北澤憲昭の制度批判的な研究がある<sup>1</sup>。この線引きの過程で、例えば、もともと日本にあった「書画」の価値観は「書」と「絵画」に分離され、絵画が美術制度の中心で光を浴びる一方、書は制度外へと周縁化された。日本では、近代の歩みにおいて、欧米を背景としない美術や芸術が公的な立場を得難かった経緯があるのだ。こうした美術制度と日本文化を背景とした美術及び芸術の価値観との齟齬は、前衛書を主題とした拙著でも論じた<sup>2</sup>。そこでも言及したように、現在、世界的な美術史研究において「近代」そのものの問い直しが進み、西欧中心に偏っていた視点への批判から、「美術」研究の周縁におかれていたジャンルや、周縁の美術の視点へも目が向けられつつある。このような学術研究の状況を踏まえ、日本文化を背景とした江戸期以前の美術及び芸術といったもののありようと、現在との接続を探究するための学術調査の一環として、本インタビューは計画された。

合気道は、植芝盛平（1883-1969）が大正から昭和にかけて創始し、現在では日本のみならず、世界に広く普及している武道である。多田は植芝の直弟子であり、1929年（昭和4年）に東京で生まれ、93歳の現在も現役で活動している。1964年（昭和39年）にイタリアへ渡りイタリア合気会を創設、欧州での合気道普及に大きな役割を果たすとともに、日本では合気会本部師範、防衛庁師範を務

1 北澤憲昭『境界の美術史——「美術」形成史ノート』ブリュッケ、2000年、北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』美術出版社、1989年、佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、1999年。

2 向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム——「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

め、早稲田大学、東京大学など多くの大学合気道会設立に尽力した。戦後の国内外での合気道普及においても重要な人物である。そもそも日本では「芸術」は「武術」であったと語り、著作『合気道に生きる』にも「芸術の時と場」という項目がある多田の合気道の実践は、呼吸法と瞑想に基づき「相手との同化」が重視され、イタリアでは「動く禅」と評された<sup>3</sup>。この合気道観は、拙著で取り上げた書家森田子龍の、呼吸を重視し「筆と自己との一体化」を述べた独自の書論を思い起こさせ、その類似性も気になるところである<sup>4</sup>。

本インタビューは冒頭から述べたような問題意識のもと、昭和初期に東京で幼年期を過ごし、武術を芸術と考えるに至った多田の活動が、どのようにその時代の社会や生活、生育環境と関連しているかを聴取することで、同時代の「日本」や「日本文化」、「日本文化を背景とする美術及び芸術」といったものを考察する手がかりとなることを意図して実施された。ただ、日本での美術や芸術のありようの探究に際しての合気道への視点の展開は、いささか突飛であるように見えるかもしれない。ここには、筆者の作家としての活動も影響している。筆者は現代書家・アーティストとして作家活動を行い、書いている瞬間に興味を持ってそれを発信する「書くライブ」を開催していた。活動を通じて、音楽家やダンサーと共演し、多数のダンスワークショップに参加する中で、自らの探究する書の身体性が欧米を源とするものではないと感じ、合気道と出会った経緯がある。筆者が体験した「見えない線」が扱われ、空間に見えない線を書く合気道の稽古は、白い紙に文字の形の配置をイメージし、それを書く行為と非常に近いと感じた。作家の感性としては、日本文化を背景とした美術や芸術と合気道と関連づけることが突飛に見えるのは、日本近代の美術制度が欧米のそれを基準に整備された影響であり、それをなくして見ると、さほど意外な関連でもないのではないか、という感覚を持ったのである。そして、先に述べた世界的な美術史研究における西欧中心に偏っていた視点への批判を鑑みると、そのような疑問には一考の余地があるのではないかと考えた。

ただ、拙著でも指摘したとおり、制度から周縁化されているジャンルでは資料が残りにくく、研究が進みづらい。本稿では、そうした研究の可能性をひらくため、オーラル・ヒストリーの手法を援用した聞き取り調査を行った。これは、今後の研究の基盤となる貴重な資料となる。また、戦争を挟んだ時期の昭和の生活が垣間見える本インタビューは、世界的に新たな戦争の影響が波及し続けている現在、日本の美術及び芸術を巡る問題にとどまらない意義があろう。そして後述するように、実際、多田が合気道家へと歩みを進めた岐路にも、戦争の影響があった。

## II インタビュー実施概要とインタビューの記録

### 2.1 実施概要

タイトル：合気道家多田宏インタビュー第1回

実施日：2022年12月23日

実施場所：東京都武蔵野市月窓寺和室（書道室）にて

インタビュアー：向井晃子

3 多田宏『合気道に生きる』日本武道館、2018年。

4 向井『戦後前衛書に見る書のモダニズム』。1960年代には、森田は海外で作品発表を行っており、森田とともに墨人会を設立した書家の井上有一も海外で個展を開催している。合気道の欧州普及と時期が一致していることも興味深い。

書き起こし：向井晃子

備考：本インタビューは、多田宏著『合気道に生きる』（日本武道館、2018年）を参考にしつつ、詳細を聴取する方針を取った。複数回実施する予定のインタビューの第1回で、主に幼少期に光を当てている。

## 2.2 インタビュー記録

本稿では、紙幅の限りから、インタビューを通じて浮かび上がった戦争の影響とそれに関連する話題を重視して、抜粋と構成を行った。プライベートな話題もあることから、本節の内容とその公開についてはインタビューの確認と了承を得ているが、当然ながら本稿の責任は筆者にある。

表記の凡例を下記に示す。

- （ ）内は、補った言葉である。
- 本インタビュー内で示される多田宏著『合気道に生きる』（日本武道館、2018年）については、『合気道に生きる』と表記する。

\*記憶の始まりは、自由が丘の家

(持参された写真アルバムを見ながらインタビューが始まった。)



図1 叔母、いとこたちと自宅で

多田：3歳のときはもう自由が丘です。昭和4年（1929年）12月14日に生まれて、昭和7年（1932年）に（父親が）自由が丘に家を買って入るから。これが自由が丘。これ、いとこたちですよ。これは（図1）自由が丘の玄関と庭とを仕切っているとこ。自由が丘のうちで、みんないとこたちですよ。叔母といとこ。。

多田：これが母親ですね（図2右端）。これ（図2左端の女性）は姉（ねえ）や。春さん。女中さん。



図2 両親、春さんと自宅の庭で

向井：当時は女中さんがおられる家というのはわりと一般的だったんでしょうか？

多田：ええ、一般的です。

向井：そうなんですね。

多田：大体のうちに。戦争中になるといけませんけどね。うちにはいましたけど。父親が昭和15年（1940年）に出征して、母親と姉やと、三人だけになりました。あの頃は（女中さんは）住み込みで。ないうちもありましたけど。

向井：どのようなところから来られるのでしょうか。

多田：大抵は、房州。館山から。千葉から来ます。決まった千葉の館山の近くの農家の娘さんの。それで次々紹介されてくるわけです。その人がお嫁に行ったりすると、誰か近くの人というので、その次の人が来て。（自分の）生まれたときからそうです（既に女中さんが居ました）よ。

向井：農家の娘さんの就職というか働き先に、ということですね。

多田：お嫁入りするまでね。

向井：はい。

多田：お嫁に行くと交代になるんです。一生いるわけじゃないんですよ。だけど昔のここには載っていないけど母親の里、荒井といいますけど、そこには4、5人いましたよ。だからそういうばあやみたいなのが取り仕切ってるんです。女中頭です。それで東京のうちと、鎌倉のうちと。僕の父親の方のうちは、祖父が裁判官だから、祖父は対馬で生まれて、だから明治維新の後で苦労したわけです。僕の曾祖父のときに、あれ（『合気道に生きる』）に書いてます。

向井：はい、私も読ませていただきましたし・・・

多田：対馬藩で、勤皇佐幕が絡んだ御家騒動があるんですよ。それで二人、うちは斬られるんです。勤皇派だったものですから。系図で、ほんとの系図は明治維新ときになくしてしまって、その写しで、その巻いたやつは銀行の金庫に入れてあります。その写しみたいなのもうちにありましたけど、昨日見たけど置いてきてしまいましたね。

向井：こちら（図3）は自由が丘のお家ですね。



図3 自由が丘自宅の庭の犬小屋前で

多田：はい、自由が丘。必ず犬がいたんですよ。

向井：はい。お父様お母様がワンちゃんお好きだったんですか。

多田：ええ。姉やさんが、世話してました。

向井：はい。当時は犬がいるお家は珍しかったのですか。

多田：いや、そんなことなく、みんな放し飼いですよ。

向井：そうなんですネ。

多田：当時、これ（檻に入れるの）は珍しいですよ。血統が雑種になっちゃ困るからこれ、入れてるんですよ。血統はテリアやなんかね。あの頃は猫、戦前は、猫と同じで犬も放し飼いですよ。犬の怖い人は大変だったんです。

向井：そうですね。

多田：もうあっちこっちに自由に歩いていますから。

#### \* 鎌倉の母方の別荘

多田：これは僕の母親の・・・、ちょっとごめんなさい。これは鎌倉。鎌倉の小町です（図4）。小町というのは駅を降りると左の方に商店街があって、それ越えたら段葛の・・・八幡さん、小町というのは八幡さんに向かって、こっちが八幡さんだとすると、こうなってるんじゃないかな、こう広がっている感じなんです。で、こっちは商店街。小町・・・、鎌倉よく知ってますか。



図4 鎌倉小町にある母方の祖父の別荘

向井：いえ何度か行ったきりで、

多田：日蓮の辻説法の通りがあって、段葛と平行に、そのところから山の滑川の方に入ったところに祖父の別荘があったんです。

向井：そうなんですね。

多田：母親のね。明治時代に買って。あの辺が別荘町だったんですよ。その日蓮の辻説法の辺というのは。店なんて一軒もなかったんです、昔は一軒もなかったんですよ。

向井：よく別荘にもいらっしゃったんですか。

多田：ええ。春、夏、秋、そっちに行つて。僕は鎌倉で3分の1ぐらい育ったんです。

向井：そうなんですね。

多田：うんうん。母親が好きでしたから。それで僕が小学校2年のときまで母親の父親が生きてたんですよ。

向井：はい。

多田：だから僕は鎌倉で非常に印象があるのは、幼稚園のときから小学校2年、昭和13年（1938年）の1月です。私が2年、小学校2年のときに脳溢血で（母の）父は亡くなって。現職のまま亡くなりました。その時枢密院の副議長だったんです。鎌倉はいろんな・・・、だけどそんなに、あの・・・、戦前の明治憲法で枢密院っていうのは大変ですから。その副議長っていうと、ちょっといかめしかったんですけど、そういうことするの嫌なもんですから、わりと自由にしてみましたけど。覚えてるなあ。とおーくでねサイレンが鳴ると、すぐ、ぱっと電話がかかってわかるんです。もう、とおーくの方で、山に囲まれていますから、とおーくのサイレンが響くんです。するとぱっと電話が鳴るんですよ。で、電話の係が、スギさんというばあやがいて。警察の署長から電話がかかってきて、「今サイレンが鳴りましたが、どうぞご心配なく」、必ずでした。

向井：はい。

多田：鎌倉の警察署長から。何かあったら向こうも怖いからです。

向井：お祖父さまの別荘に警察から電話がかかってきたんですね。

多田：はい。必ずかかってきました。とおーくでねサイレンが鳴ると。

向井：はい。そのサイレンが鳴ると。

多田：瞬間にかかってきて、どうぞご心配なく（と伝えました）。それで、東京大塚の仲町に（荒井の祖父の）屋敷がありました。あの頃、大変だったんですよ。私が生まれたのが4年で昭和のその初めの頃というのは、軍隊、陸軍と海軍の軍人が事件を起こすから。大塚仲町の家は石塀に囲まれていました。門を入れてすぐ右側に2階建ての小屋があって、警察官が数名毎日（常駐していました）。だけどいくら警察官いたって軍隊、武器を持った軍隊に侵入されたら、みんな……。そんな心配はする必要ないなんて言ってたけれど、起きるんですよ。昭和・・11年（1936年）の2月26日に二・二六事件が起きるわけです。その前からいろんな五・一五事件とか、相沢中佐事件とか、もうしょっちゅうあるわけです。だからすごく用心はしていました。用心はしていました。だけど意外と面白かったですよ。私は小さいからそんなこと関係ないんですけども、どちらかというとなごやかな、決して騒いだり、キャッキャ、キャッキャやることはなくて。みんな親類方、どちらの親類も（静かでした）。

向井：はい。

多田：多田の方は、祖父が裁判官でした。裁判官の判事っていうのは絶対に飲み屋とかバーとかそういうところいかないんです。司法関係者と以外は食事しない、絶対に行かない、いや、もうやめた後でもそうです。

向井：そうなんですね。

多田：で、荒井の方は、そういうことです。伯父たちも、あの本にも書きましたけど、優秀でしたから。いかめしかったですよ。けども小町のところからダーツと歩いて、由比ヶ浜まで夏、いとこたちとダーツと海水浴へ行くのが楽しかったんです（図5）。



図5 由比ヶ浜の海水浴



\* 小学校入学と戦争へ向かう時代

多田：元々青山師範というのは、東京の青山、渋谷から青山通り、あそこにあったんですよ。たまたま、我々が小学校入るっていうときに、(移転しました。) 東横線のあそこに、青山師範という(駅)、今、学芸大学とありますが、青山師範という駅なんですよ。あそこから、足で20分ぐらいかかります、子供の足で。畑の中にありました。もう今は、住宅街なんです。青山師範にそこに行くか、あるいは渋谷から多摩川の玉電、今の田園都市線、その三軒茶屋から歩いてるんですよ。だから東横線の青山師範の駅から行くか、三軒茶屋から行くか、その近辺の人。それよりあんまり通えないような遠くの方は、条件があって別の師範、青山師範の他に第二師範とか、池袋のあっちの方に師範学校の付属校があったり。大体ね、近辺の30分ぐらいで通えるような人。よかったですよ。青山師範。東京の附属。クラスはずっと一緒だし。クラス替えていうのはなくて。他にクラスがないんですから。

向井：(『合気道に生きる』に記されていた) 遊びを木登りとかコマ回しとか、それは小学校の中ですか、それとも帰ってから・・

多田：それは、遊んだり木登りしたのは幼稚園から、小さいときですね。

向井：そうなんですか。

多田：もう小学校になると何をやってたかという、結構、自転車乗って、乗ったり・・、それから、いろんなゲームをやっていたり・・、ですけど、僕らの場合は、昭和11年(1936年)に小学校入るんですよ、その年の2月に二・二六事件が起きます。

向井：はい。

多田：次の昭和12年(1937年)7月7日に日支事変が起きるんですから、日中戦争。ズーっとね、そういう時代ですから。大戦争ですよ、中国とかの。今でも覚えてますよ、南京占領とか、爆弾三勇士とか。それで、それで昭和12年(1937年)って、その4年後の昭和16年(1941年)の12月8日に大東亜戦争、今、太平洋戦争って言ってますけど、我々は今でも会うと大東亜戦争って言ってます。この戦争を大東亜戦争と命名す、と公式にあったんですから。今の人は知りませんよね。これ知らないのは、あの本(『合気道に生きる』)に書くのは・・、書いてもよかったのか、書き忘れましたが、あれはもうアメリカの占領政策ですよ。新聞の書き換えをやったんです。新聞の。あの頃は、さっきの話になりますけど、あれは昭和20年(1945年)から策定するGHQの。あの当時は不思議に思いました。既に読んだ新聞ですよ、これから読むのを検閲して交換というのは(分かるの)だけ読んだ新聞を何で書き換えるのか(と不思議に思いました)。一番・・、政治とあの、思想の、で、書き換えた新聞が今、図書館に縮刷版で出てます。

向井：はい。

多田：だからひどく戦争に対して冷淡というか地味なね、わあー、なんていう感じはないですよ。昔の新聞だから、書き換えさせてる新聞のコピーが・・・、本当の新聞は新聞社の人間はもちろん持っているはずですし。

だけど70年も経ったから、知らない人が多いですよ。書き換えがあった（ことを）。だけど書き換えがあったってということは、今の図書館に置いてある、縮刷版の社会面には載ってますよ。今、GHQの命令で集まって新聞を書き換えていますって。普通じゃそういうことを書かないけど、命令だったのかな、あれ。自分の新聞の出したことを書きかえなんて、不名誉でしょう、新聞社にとって。それが記事で出てるということは。どの新聞にもそれ。それを書き換えたことが大きな後のね、政策になるというのが今ならわかりますよ。あの当時は、何でもう出ちゃったものを書き換えるんだろう（ということが）、みんな、クラスの中で話してる（ことでした）。

向井：それがGHQが来てからのお話なので、その戦争に向かう時代にちょうど小学生を過ごされて、でもまだ当時は、そうやって自転車に乗ったりとか普通の、普通の生活は当時まだ小学生の頃は・・・

多田：普通の生活でしたね。外国から来た人が驚いたって言いますから、こんなに戦争へ・・・、一つは海の向こうだっていうこと。

向井：はい・・・、あ、はい、戦場が。

多田：中国との戦争がね。それから日露戦争なんかは、海の向こうなんですよね。

多田：日清戦争も、明治27、8年の戦争は中国の、清国との戦い。だからやっぱり・・・。そういう戦争で始まって、いわゆる軍艦から飛行機に時代が変わって、日本中が爆撃されたりなんかして。今でもね、地続きのウクライナみたいな国と日本と、なんとなく違いますよね。海の向こうの国っていう感じがあるでしょう。

向井：ええ、ええ。

多田：だから、だからそういう・・・、我々は小学校の頃っていうのは、もう中国と戦争始まっていますが、普通に海水浴行ったり、いろんなことやってね、日本の国内（で）やってたんですからね。本当に大変だったのは爆撃が始まってからですから。

向井：なので、爆撃が始まったときにすごく身近に戦争が迫ってきたという、

多田：みんな大抵はそうですよね。一番最初・・・、なんか防空壕かなんか行って・・・、早稲田の近くでしたね、それは、そもそも近くの人間が中学のときに、一緒にサトウくんと言って、うちのすぐそばが焼けたんです、爆弾落ちて。何であんなところに爆弾落としたんだということはあるけど。本当に身近になってきたのはそれ以来ですよ。

\*家族関係と空襲

向井：お家で弓をされていたのも、小学校時代の・・・

多田：初めの頃。あの、弓やるといっても巻藁ですよ。巻藁で。自宅でやるのはみんなそうなんですよ。それをやっておけば、どこ行っても（できるのです）。

向井：お父様もお勤めだったので、

多田：そうそうそう。本当は弓でも、一流だったんですから、本職でやってもいいんですよ。だけでも、どうしてかな。なかなかそれ（仕事）を作るっていうのも大変ですし。

向井：お夕飯とかは毎日お父様も一緒にお食事されてたんですか。

多田：あの一、いや、父親はね、いる頃ね、応召する前、

向井：はい。

多田：小学校5年。ほとんど晩御飯にいたことないですよ。

向井：そうなんですね。

多田：真夜中に帰ってくるか、夜遅く車で帰ってきました。

向井：ではやっぱりお父様とお話できたのは、そういったお休みの日とか、

多田：休みの日にね。そう。はい。

向井：何かご本（『合気道に生きる』）にも家族団らんの際に相撲の話や武道の話をされたら、

多田：そうそうそう。お茶の間でやっている。あれ、そうですね。

向井：ご本にもお祖父様からお父様に伝えられた侍の教えが多田先生の武道観の基礎になっていると書かれていて、

多田：まあ、まあね、簡単なもんですよ。人のことを批判しないとか。

向井：お父様との話の中、そういう武術的な話とか、あとはお家の歴史の話なども、お父様はされたんでしょうか。

多田：祖父がしました。

向井：お祖父様が、そうなんです。それは小さいときというよりは、一緒に住まれるようになって、

多田：そうそうそう。だって母親が亡くなってから。それから。(祖父は) 一番最後、名古屋の裁判所長で定年なんです。

向井：はい。

多田：名古屋とかそういうところは、(祖父は) 誰も知らないんです。それで、東京には長男が、僕の父親がいるでしょ。で、次女の久子は、渋谷の松濤に屋敷があったんです。それみんな戦争で焼けてしまったんですけど。だから東京も渋谷の鶯谷というところで、借家かりて。だから祖父がそこにいるときは、よく遊びに行ったんですよ。代官山から歩いていくか、渋谷から歩いて行くか、だいたい、うちが自由が丘ですから、代官山から猿樂町に抜けて、道玄坂の方に向かっていくと、そうするとね、映画なんかに連れてってくれたんです。ターザンの映画とか、あの頃はワイズミュラーの、ワイズミュラーはオリンピックで優勝した、アメリカのあれとか、そういういろんな面白い、映画を祖父が好きだったから、連れてってくれたんです。小学生ですよ。

向井：そうですね。

多田：そう。

向井：ずいぶんいろんなところに、電車でお出かけになる小学生だったのですね、先生。

多田：あの、東横線、今と全然違いますよ。二両ぐらいつながってるぐらい。簡単な田舎の電車でしたよ。今、ずいぶん、近代化というか、ハイカラというか、何と言うかですけど。

向井：東京も全然今とは違って・・・

多田：うんうんうん。だって自由が丘といたら、何にもない普通の小さい商店だけで。鰻屋ができたって言って、大和田というのが(できたので)、大騒ぎしてたんです。その商店街が、あの東京大空襲、5月25日かな、あそこ(『合気道に生きる』)に書いてます。商店街が全部焼けるんですよ。東横線に沿ってる一部はそれよりも前に、東横線のために強制疎開、全部潰されるんです。それでこっちは潰されないでよかったなあって、商店の人たちみんな言ってたんです。そしたらそこが全部、空襲でちょうど商店街だけ、全部焼けました。それから一部の住宅街も焼けたんです。それが話したうちの三軒下とか、もっと……。焼けるときはそこへ集まって、焼夷弾が運悪く、重なって、それで、そこだけがぼこーん、ぼこーん、と焼けちゃうんです。うん、かわいそうで。あれは、もう。それ・・・で、その3ヶ月後に戦争が終わるわけですから。

向井：はい。

多田：その頃、3ヶ月前というのは、まだ満洲とかそっちの方は安全だと思っていたんですね、日本人は。外国に対する知識とかそういうのが、やっぱり島国だから、どうしても甘いんですよ。今度のウクライナの戦争見れば、どんなに、物資を買ってるか。だけど日本は危険だから、満洲に学童疎開で子供を連れてくなんてことを平気で、本気で考えてましたよ。

\* 親戚関係と合気道との出会い

多田：普通、親類やなんかでそんなこと（合気道を仕事に）やってる人間がいないんですよ、昔はね。サラリーマン、大会社に入るか政府の役人になるか、僕のいところだって、みんな、あれです。この本『合気道に生きる』に書いた鈴木幹雄さんは内務官僚で、島根県知事、警視総監にもなっていて、衆議院議員にもなりました。

向井：鈴木幹雄さんが寛子さんの旦那さんで、

多田：寛子の、ウチの、僕の一番親しい倉富の（いとこ）、女2人男2人なんですよ。一番上の（いとこが）これ（写真アルバム）に出てるんですよ。さっきの（写真）に載ってたでしょ。龍田丸<sup>5</sup>。

向井：あ、はい。

多田：女性がいる、あれが寛子さん。

向井：はい。

多田：僕の一番上のいとこ、こちら（写真右端の男性）の娘。こちら（写真右端の男性）は倉富鈞とって、貴族院議員ですよ、このとき。

向井：そうなんですね。

多田：彼は貴族院議員。それで彼の父親は、倉富勇三郎とって、枢密院議長。大正から昭和にかけて長い間。倉富というのは男爵です。だから家族は、みんな、寛子や、みんな学習院です。昔はね。僕も小学校のとき学習院に入るっていったら、遠いって言うんですよ。

向井：ええ、ええ。

多田：それから、うーん（と）父親が（渋って）どうかなー（と言っていたら）、青山師範がすぐ（移転して）きたとこに（合格して）入ったから、そっちへ行きました。

---

5 アルバムにあったこの写真は、多田『合気道に生きる』の22頁に掲載されている。

多田：ヒロさん（寛子さん）やなんかは家内がバイオリ・・・、僕が結婚して、バイオリニストで、第一生命ホールの演奏会やらで鈴木さん、幹雄さんたち、みんな来てくださってましたよ、もうみんな亡くなりました。鈴木<sup>6</sup>の幹雄さんの父親は鈴木喜三郎で、

向井：はい。

多田：彼、党首だったんですから。

向井：すごく、先生のご親戚皆さんご活躍で、重要な任務でご活躍の、

多田：戦前はね。戦前、山崎は最後の満鉄総裁だし。倉富の伯父は貴族院議員で、彼の父親は倉富勇三郎。母方の祖父の荒井賢太郎は、大正11年（1922年）の海軍大将加藤友三郎内閣の農商務大臣でした。僕の母親の一番上の兄は、満洲国の官僚ですよ。あれのトップです。だから皇帝の溥儀と一緒にソ連に抑留されて、大変だったんです。その家族は、伯母と僕のいところが2人、上が女で下が男でした。男の方の定雄というのは、荒井の跡取りなんですよ。（彼は満州から）帰ってくる間に亡くなりました。その伯母の里は水町です。水町袈裟六ってやっぱり枢密院に・・・、顧問官ですよ。

向井：そういう重要なお仕事されているご親戚が多いことが、先生にすごく影響があったのではないかと思います、

多田：まあ、親戚っていうのは、そういうもんだと思いますけどね。

向井：ええ、ええ。

多田：あんまりお金のことって言いませんね。どちらかというと。

向井：はい。

多田：役人や、お祖父さんは裁判官でしょ。絶対にね、そんな・・・。父親がまるで違って、銀座のバーなんか知らない人間ないっていうぐらい、あれだったんですけど。

向井：そうなんですネ。

多田：ですけど・・・、（笑）ですけども、父親はなにしろ武家の（育ち）だからちょっと違いますよ。金のことでは、絶対けんかしません。子供のときから期待を集める人で、祖父が小さいときから見込んで、弓術や勉強を教育して、父親も稽古を休むことはなかったということです。それから荒井の方ではあれですし、・・・だから（社会的地位が高いからと言って）どうってわけじゃ

---

6 鈴木喜三郎は五・一五事件後に政友会総裁となった政治家。

ないんです、何でもない普通の人間です。ずーっと伯母がいて、一番上の伯父の静雄が満洲で、だから長春へ、昭和 17 年に満洲行ったときは、とても一緒になって面白かったんです。

向井：はい。

多田：こういう合気道をやるとか、そういうものをやるっていうのは、とてもいいんだけども、それを専門にやるっていうのは、違いますから、

向井：はい。ええ。

多田：びっくりしますよね。「自分もそれやりたいけど・・・、そういうあれは、ちょっとね・・・」と。ふふふ、ふっふっふっ(笑)。それはどうしてか。ちょうど戦争終わったときに、僕は 15(歳)です。

向井：はい。

多田：天皇陛下の玉音放送の時ですね、そのとき学校、あの・・・(勤労働員で)、愛宕山の下に防空壕のために穴を掘っていたところの土を運びに行き、もうその前 2 年ぐらいからね、3 年めになって、それ 4 年のときなんですよ。もうね、防空壕の土運びとか、中央郵便局の郵便配達に、勤労働員で動員されて、もうこりごりでしたよ。で、それ 8 月 15 日は天皇陛下のお話がございますって、僕、(勤労働員を) 休みましてね、・・・それで、戦争で・・・、ね、終わりましたって。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」と聞いて、全身が痺れるくらいの緊張がありました。ああ。みんなショックで。それが真夏でしょ。8 月の 15 日。(ちなみに) イタリアじゃ、フェラゴストといって、8 月 15 日はね、家族で、いつもヨーロッパで 8 月 15 日は、アッシジのあそこか、あるいはスイスのマッターホルンの下、どっちかにいました。結婚してからは。(話は戻って、) それで、日本の文化とは何かとか、日本はどういう風になるか、日本という国がなくなるか。ああ、それからやっぱり、却ってね(日本について考えるようになって)、それで早稲田で空手、一生懸命やって、植芝道場(と出会いました)。植芝先生の話は昭和 17 年(1942 年)、僕が満洲行ったとき建国 10 周年で大演武会があったんです。(それを) いとこの定雄から(聞きました)。(満洲で) 亡くなった、さっき話しました、いとこの定雄が、植芝先生がバーッとやったら、人間が 10m ぐらい飛んだって言うんですよ。彼にはそう見えたんでしょう。バーッと。そういうものがね。日本の文化というのはどの程度の力があるのか、そういうものとか、ずーっと、ヨーロッパとか、なにかそういう(外国に対して)、日本のそういうものが世界的にちゃんと通用するのかなというのは、どうしてもわからないから(追究したいと思いました)。

向井：はい。

多田：それから、満鉄。一晩でなくなって、なんか経済というものは底の浅いもんだなあと思ってね。今も本当のところはそうですよ、大会社大会社だと言っても、何かあったら、コロッとひっくり返る。底が浅いんですよ、経済界というのは。なんかつまらないなあって(笑)。

向井：はい。

多田：そしたら、やっと師匠、合気道と（に出会いました）。いところが（当時）生きていて、「そりゃあ、宏ちゃん、うらやましいなあ」って（言っていました）。ふふふ・・・、ふふ。

### III おわりに

インタビューを文字にする時には常に、文字には起こしきれない要素が発生する。今回では、インタビューアの発言に被せぎみの活力に溢れた発話、語ることが湧き上がり言葉の速度がそれに追いつかないような速い語り口、話が次々と展開して当時の光景が目の前に繰り広げられているようであったことを、そういった要素として記し、補うこととしたい。本インタビューでは、父方の祖父からの武家の流れを引く実直な気風、それを礎にしつつ朗らかに活躍した父、母方の錚々たる親戚関係に囲まれた幼少期の環境があり、戦争を機にそのような社会的地位の高い親戚の立場が一瞬にして変化することを目の当たりにした経験、また、敗戦を挟んで、「日本」や「日本文化」がどうなっていくのかを思い、それは海外に通じるものなのかを探究したいと考えたことが、合気道の出会いとその追究へと繋がる契機の一つとなったことが語られている。

本稿冒頭でも述べたように、一口に「日本」や「日本文化」と言っても、例えば昭和初期と現在とでは社会状況は大きく異なり、それらのありようや捉え方も異なるはずである。昭和初期の東京の一地域での生活環境と現在のそれとの差異を確認するため、「幼少期の習い事」、「自由が丘の家の生活」、「家庭での宗教や信仰の経験」といった内容も聴取した。しかし本稿では、紙幅の限りもあり、インタビューを通じて浮かび上がった戦争の影響を重視して、それを優先した抜粋と構成を行った。今回抜粋しなかった部分では、戦争へ向かう時代ではあったものの、今日のように都会化されていなかった東京での幼少期の暮らしの長閑な雰囲気語られており、戦争の影響と対照的であった。これらについては、別の機会に執筆したいと考えている。

現在、世界的に新たな戦争の影響が波及し続けている中、日本社会は人口減少の局面にある一方でグローバル化が進み、海外にルーツを持つ日本人も増えている。日常生活でも、例えば、木造建築が減少し、畳の部屋がある家も少なくなるなど、変化は大きい。そのような時代に「日本」や「日本文化」、「日本文化を背景とする美術及び芸術」とは何を指し示すかを考察する際には、それらが根ざす日常生活や社会の変化を踏まえて見ていくことが必要であり、本インタビューはそのための貴重な資料となっている。

### 図版出典

図1～図5：多田宏写真アルバム（赤表紙、33×30×3cm）

### 参照文献

北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』美術出版社、1989年。

北澤憲昭『境界の美術史——「美術」形成史ノート』ブリュッケ、2000年。

佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、1999年。

多田宏『合気道に生きる』日本武道館、2018年。



向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム——「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

〔附記〕本稿のインタビュー調査実施にあたり、多田宏師範、雲洞山月窓寺、合気道月窓寺道場並びに道場生の皆様方にご協力を賜りました。末筆ながらここに記し、深くお礼申し上げます。